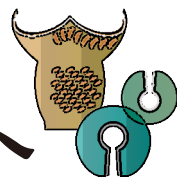


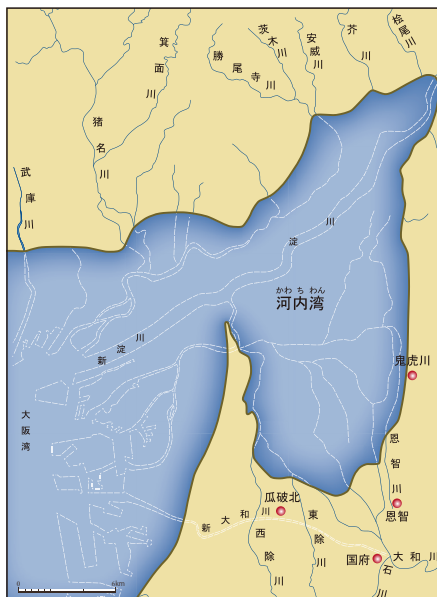
史跡 国府遺跡

縄紋から弥生へ

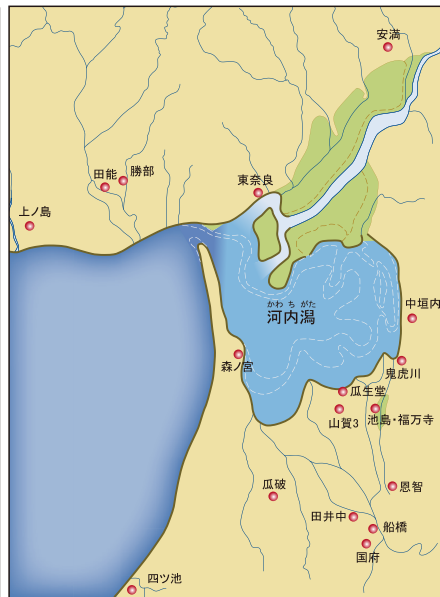


国府遺跡は、石川と大和川の合流地点の南西に位置します。藤井寺市惣社・国府周辺です。ここから旧石器時代の石器が見つかり、約2万年前にこの地で人類が活動していたことが明らかになりました。また、縄紋土器や弥生土器とともに90体もの人骨が発見され、それらの中には^{けつじょう}塊状耳飾りや首飾り、腰飾り、足輪などを装着したものもあります。国府遺跡は、旧石器時代から中世にわたる集落遺跡として1974年(昭和49年)に国の史跡に指定されています。

今回は国府遺跡から出土した縄紋時代から弥生時代の遺物を展示します。縄紋時代の大阪平野は、気候の温暖化により、河内湾と呼ばれる海水面が広がっていました。大和川は北西に向かって流れ、河内湾に注いでいました。弥生時代には、海水面が徐々に後退し、河内潟(汽水湖)となりました。国府遺跡はお隣の船橋遺跡とともに大きいムラでした。そこでの人々のくらしは、どのようなものだったのでしょうか。



縄紋前期(6000年前)の大阪周辺地形



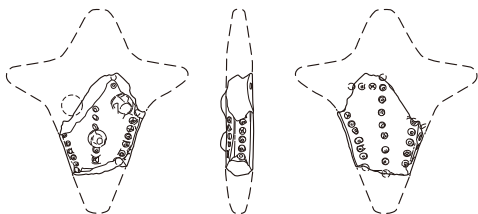
弥生前期(2500年前)の大阪周辺地形

[梶山彦太郎・市原実『続大阪平野発達史』1985より作成]

次に時代ごとに展示物の解説をします。

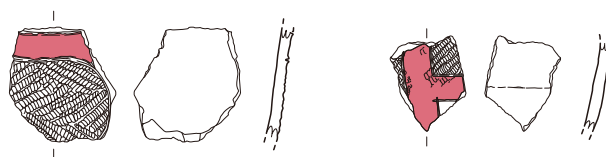
◇縄紋時代前期

5000年も前の縄紋土器ですが、薄く丁寧に作られています。現代においても色あせない縄紋人の高い技術力がうかがえます。



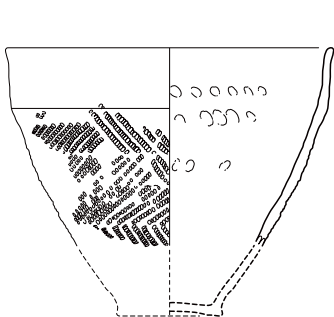
土偶

板状土偶です。全体は十字形を呈すると思われます。表裏に刺突紋を連ねて紋様を作り、小さな粘土を貼り付けることで乳房と臍を表現しています。縄紋前期のものとするれば、近畿地方では珍しい例です。



にぬり 丹塗の縄紋土器

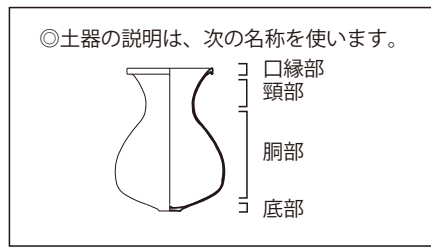
国府遺跡で出土した縄紋前期土器には赤色顔料(ベンガラ)を塗った土器が少量含まれています。これらには小型の精製土器から、大型の甕形土器があります。何か特別な用途があったのでしょうか。北白川下層Ⅱb・c式に属します。



塊状耳飾りと縄紋土器

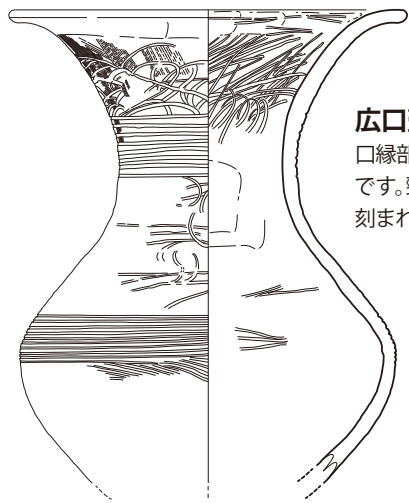
考古学者北野耕平先生が採集され、藤井寺市に寄贈されました。縄紋人骨に装着されていた耳飾りと頭部をおおっていた縄紋土器です。塊状耳飾りは、この土器によって縄紋前期後半北白川下層Ⅱc式のものとして特定できました。

◎この2点は、令和4年3月、新たに藤井寺市指定有形文化財に指定されました。



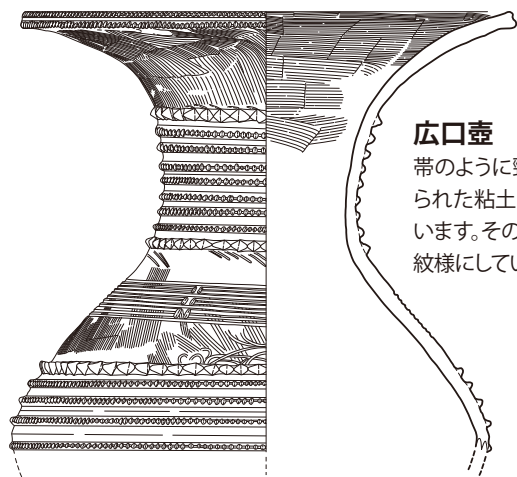
◇弥生時代前期(およそ2500年前)

弥生時代前期後半の土器群です。粘土に、粗い砂粒を多く混ぜ、ヘラ状の工具で描く直線の紋様が用いられます。これらの土器は、主に甕は煮炊き、壺は貯蔵用、鉢は盛付用に使用されました。この頃に、鉄器や青銅器なども伝わり、弥生文化が大きく花開く時期です。



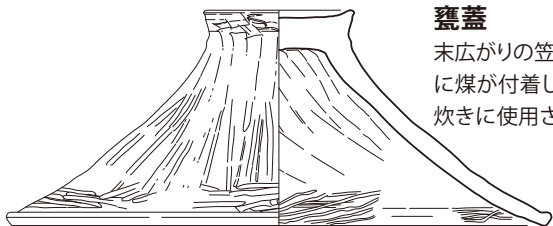
広口壺

口縁部径と胴部最大径がほぼ同じです。頸部と胴部に直線の紋様が刻まれています。



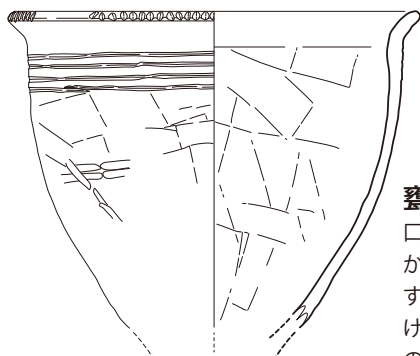
広口壺

帯のように頸部と胴部に貼り付けられた粘土の帯は、貼付突帯といえます。その上から刻み目をつけ、紋様にしています。



甕蓋

末広りの笠形です。口縁部内面に煤が付着していることから、煮炊きに使用されたと思われる。

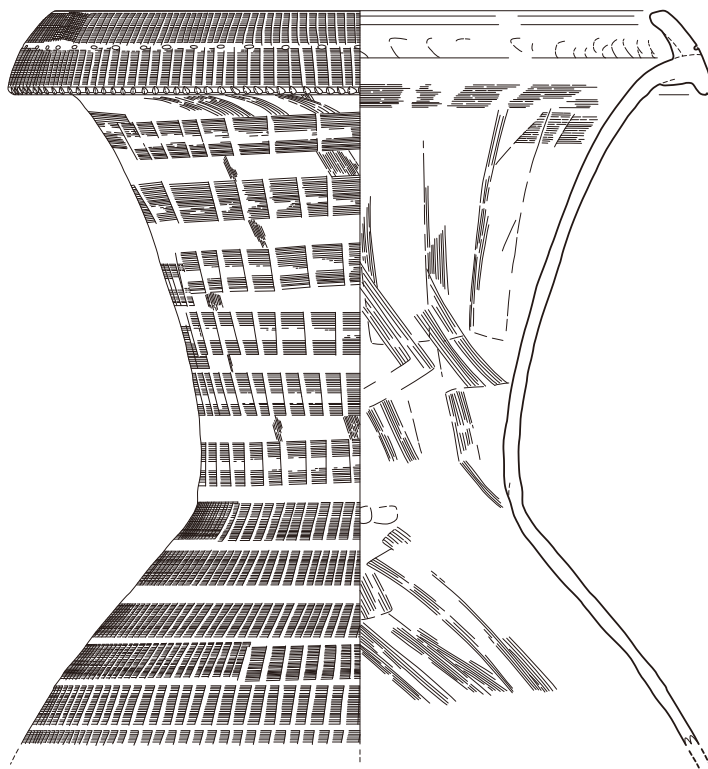


甕

口縁部が大きく開き、底に向かってすぼまる形をしています。口縁部には、刻み目をつけられ、その下に4条の直線の紋様が刻まれています。

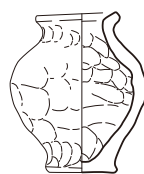
◇弥生時代中期(およそ2100年前)

櫛状の工具で描かれた紋様(櫛描き紋様)が盛んに用いられる時期です。鮮明な櫛描き紋様からは、作り手の息使いが聞こえてきそうです。きめ細かい粘土に混ぜられた金雲母や角閃石が輝きを放っています。土器の種類も多くなり、変化に富んだ土器群です。



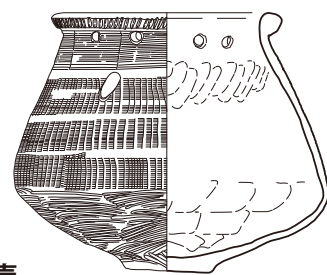
有段口縁の広口壺

大型の壺です。粘土を積んで上方にも拡張する口縁部が特徴です。底部まで復元できていませんが、球形の胴部が続くと思われます。



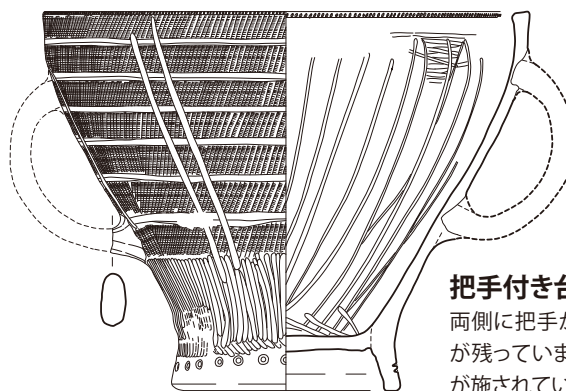
小型壺

完形で出土しました。成形時の指の跡が残っています。



無頸壺

完形で出土しました。口縁部のすぐ下にあいている2組の穴は、蓋を結ぶ紐穴と思われます。



把手付き台付き鉢

両側に把手が付いていた跡が残っています。丁寧に紋様が施されています。



広口壺

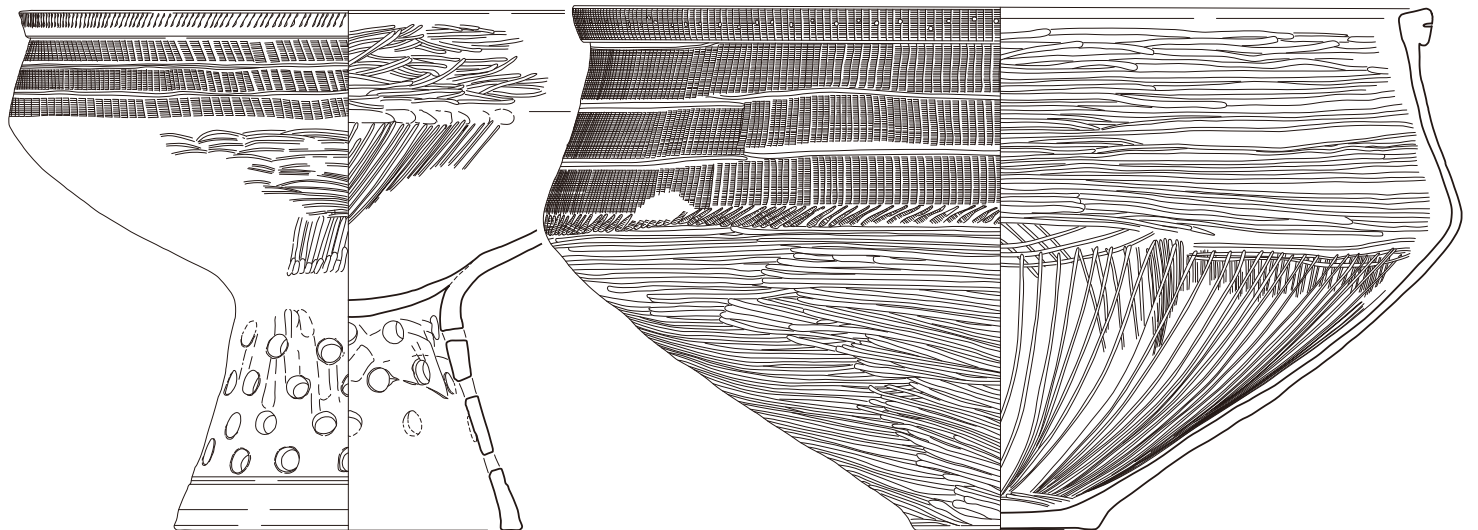
とても薄く作られています。櫛描き紋様の簾状紋が密につけられ、端部が下に拡張する口縁部が特徴です。

甕

大型品です。甕は、壺や鉢とは異なり、装飾を施しません。外面はへら状工具で丁寧な磨いています。

細頸壺

土器の厚みは薄く、当時の高い製作技術がうかがえます。外面全体に多様で繊細な紋様がつけられています。



台付き鉢

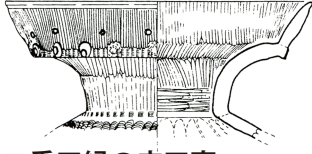
赤い焼き上がりと多くの穴をあけた台が特徴的です。大和地方から運ばれたと考えられます。

鉢

大型で、紋様が美しい鉢です。見る角度によって金雲母が光って見えます。

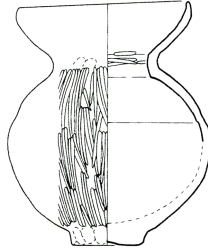
◇弥生時代後期(およそ1800年前)

弥生時代後期後半の土器群です。紋様で飾ることが減り、小型化していきます。また、土器の種類も減少します。



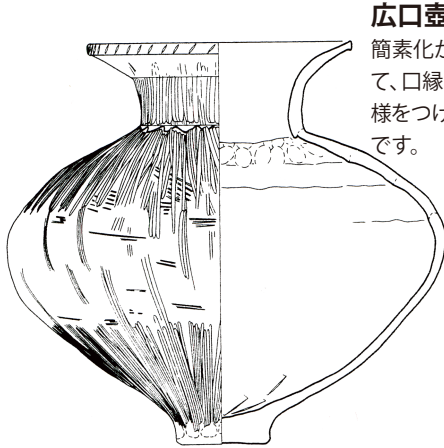
加飾二重口縁の広口壺

口縁部が二段階に立ち上がる特徴ある形で、この時期から成立したとされる広口壺です。様々な紋様で飾られています。



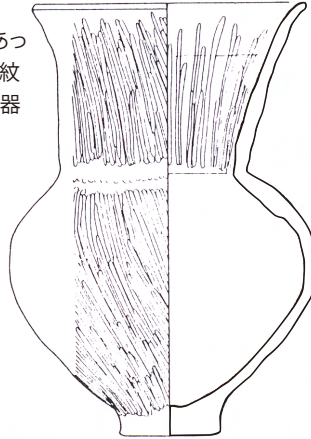
小型の広口壺

口縁端部は内側に少しすぼまり、胴部は球形をしています。



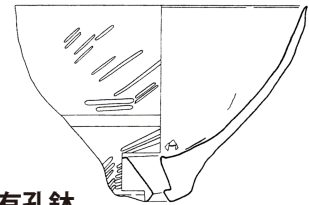
広口壺

簡素化が進む中において、口縁部や頸部に紋様をつけ飾られた土器です。



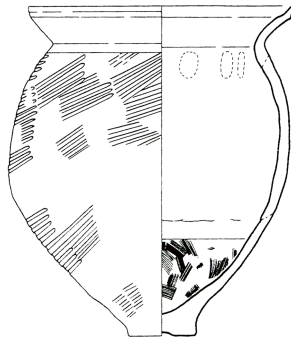
長頸壺(参考資料)

この時期によく見られる形の土器です。球形の胴部に長い口頸部が付きます。



有孔鉢

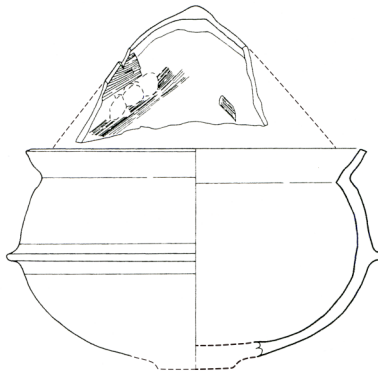
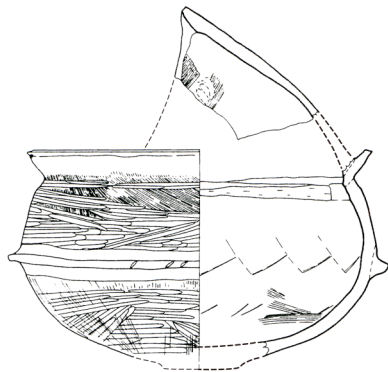
小型の椀形で、厚手の底部に上下2方向から孔をあけています。その使い道は、よくわかっていません。



(タタキ板)

甕

この時期よりタタキ板を使って形を整える、タタキと呼ばれる新しい技法が用いられるようになります。古墳時代には、さらに器壁が薄くなり、底の形が丸くなっていきます。



てあぶ 手焙り形土器

受け口状口縁をもつ鉢にドーム状の覆い部が乗る形をしています。この独特な形の土器は、その成り立ちや機能が十分に分かっていません。古墳時代はじめ頃まで見られる土器です。

◎遺物実測図は、実物の1/4の大きさです。



発行・編集

藤井寺市教育委員会文化財保護課

2024.2改定